



上林曉全集十五

筑摩書房

上林曉全集 十五

昭和四十二年八月三十一日發行

著 者 上 林 曉

發 行 者 竹 之 內 靜 雄

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京(291)七六五一(代表)

振替東京四一二三

印刷 大日本法令印刷株式會社

製本 矢島製本株式會社

© A. Kanbayashi, 1967

上林曉全集第十五卷目次

評論・感想

昭和十四年——昭和十六年

外的世界と内的風景……………	三
純粹への郷愁……………	ハ
わが評論の態度……………	一三
天分と努力……………	一五
私の内面的企劃……………	一九
文學俗化の問題……………	二一
文藝時評……………	二三
時局と文學の二潮流……………	三五
川端康成氏の人と藝について……………	三〇
上野博物館にて……………	三三
新ロマンチズムについて……………	三五
田舎生活への思慕……………	三六

トオマス・マンとハンス・

カロッサ……………	三六
自己を語る……………	四一
辛辣なる作家について……………	四三
作家論の擡頭……………	四四
ジイドと藤村の場合……………	四六
新浪漫主義文學への要望……………	四九
短篇小説論……………	五二
文壇の新動向……………	
文學と國策……………	五五
作家の社會的地位……………	五七
歸還した戦争作家……………	五八
新人の動き……………	五九
病氣と仕事……………	五九
文藝時評……………	六三
藝術的理解と人間的理解……………	六六

政治的關心について……………七三

現代文學と自然への郷愁……………七五

若き世代について……………七八

「風の中の子供」鑑賞……………八三

新體制に面して……………八五

作家の場合……………八七

作家の感想……………八九

「無奈苦茶な文章」……………九〇

節度ある文學……………九二

詩人の境涯……………九四

附、詩人の誇り……………九五

文學の地盤としての日常性……………九六

文藝時評……………一〇五

歴史小説の勃興……………一〇八

苦悶の喪失……………一一〇

自己に即して……………一二〇

文章時評

1 モンテーニュの文章論に關聯

して……………一二四

2 感心した文章について……………一二五

3 文章の説得力について……………一二六

4 文章を拜むところ……………一二九

文學者の宿命……………一三三

葛西善藏……………一三五

私小説私觀……………一三八

文藝雜誌の統合……………一四〇

青春について……………一四三

農民氣質……………一四六

文學的忠言への感謝……………一四七

昭和十七年——昭和二十年（四月）

故郷への回歸……………一四七

小説を書きながらの感想……………	一五
私小説論議……………	一六
文學者の功罪……………	一七
里見弴氏の作風……………	一七
文學と冒険……………	一八
文學の振・不振の問題……………	一八
嘉村磯多……………	一八
やつつけられた朝……………	一九
文藝時評……………	一九
横光・川端……………	一九
伊藤整小論……………	二〇
文學者の本然……………	二〇
藤村の信念……………	二〇
僕の文學的故郷……………	二〇
徳田秋聲氏の死……………	二〇
表現への執着……………	二一

私小説の新意義……………	二四
文學と處世……………	二六
僕の讀書……………	二六
戦時下の讀書……………	三一
最近の讀書……………	三三
僕の讀書法……………	三四
讀書餘録……………	三七
東京に在りて……………	三八
純文學のために……………	三三
現實に即して……………	三七
作家と窮乏……………	三四
昭和二十年——昭和二十六年……………	
極靜の地獄……………	二四
文藝時評……………	二四
戦時中の文學論……………	二五

永井荷風と志賀直哉……………二五四

作品管見……………二五七

わが文學の途……………二六〇

新文化の建設について……………二六一

人間則文學……………二六三

島木健作「出發まで」……………二六五

大家論……………二六七

最近の文藝雜誌から……………二七一

好きな作品・嫌ひな作品……………二七四

小説の面白さに就き……………二七八

野暮の文學……………二八〇

私小説の運命……………二八五

文學と修道院……………二九一

讀みにくい小説・讀みやすい小説……………二九二

文學一家言……………二九四

ジャアナリズムについて……………

或る青年雜誌の編輯者へ……………二九七

或る兒童雜誌の編輯者へ……………二九九

或る婦人雜誌の編輯者へ……………三〇〇

或る文藝雜誌の編輯者へ……………三〇三

或る文化評論雜誌の編輯者へ……………三〇三

田舎にて文學について……………

思ふた事……………三〇六

文學的私事……………三一〇

太宰治の死……………三二三

創作餘話……………三二四

文藝時評……………三二七

新聞雜感……………三二九

取巻風景……………三三一

太宰君……………三三三

私小説作法……………三三五

短歌小感……………	三三
私は誠實でありたい……………	三三
文藝閑談……………	三七
文藝閑談……………	三四
ジイド斷想……………	三四
求める心の喪失……………	三九
私小説家の立場……………	五一
文藝誌今昔比較論……………	五六
不満と不信……………	五六
作家の生死をめぐる……………	五九
昭和二十八年——昭和三十八年	
手前味噌……………	三二
茂吉の歌に寄せて……………	三五
ルーヴル展觀覽……………	三七
川崎文學略解……………	七〇

花袋作品の印象……………	三七
私小説を説明する……………	三七
芥川管見……………	三七
太宰の死に憑かれてゐた私……………	三八
萬世一系の私小説作家……………	三八
映畫化一度の感想……………	三六
モデル……………	三六
連載未経験者の辯……………	三八
宿命と獨創……………	三九
文學修業……………	三九
「早稻田文學」の合本……………	三七
短篇小説覺書……………	三九
私小説作品の受賞……………	四〇
ヘッセ・メモ……………	四〇
教科書に想ふ……………	四〇
自作自解……………	四一

「野」…………… 四一〇

「天草土産」…………… 四一一

「薔薇盗人」…………… 四一四

「二閑人交遊圖」…………… 四一六

「聖ヨハネ病院にて」…………… 四一八

「ちちははの記」…………… 四二〇

「春の坂」…………… 四二三

「諷詠詩人」…………… 四二四

補遺

春泥…………… 四二七

田園詩…………… 四三〇

無所有の幸福…………… 四三三

創作の祕密…………… 四三八

寒日記（病床日記）…………… 四四八

早春日記（續病床日記）…………… 四五六

書誌…………… 四六九

上林曉書目・年譜

書目…………… 四七七

年譜…………… 五一七

索引…………… 五三九

評論・感想

外的世界と内的風景

「私自身の問題としては、『我等何を爲すべきか』をつくづく感じてゐます。實際何をかいていいか、何をかくべきか、分つてゐる筈のものが一寸分らないやうな氣持です。」

この懷疑的な言葉は、室生犀星氏の「昭和十三年の文藝界」に對する感想だが（新潮）、僕はこれを非常に正直な告白だと思つた。室生氏の思ひ屈した溜息を聞く思ひすらした。長年の勞作の後の倦怠から出た力ない言葉だとはもちろん思はない。むしろ、この轉換期に臨んで、最も良心ある作家の眞實の聲だと思つた。室生氏ほどの作家が、ここまで進んで来て、今になつて、「何を書いていいか、何を書くべきか」分らないやうな氣持だとは、悲痛である。この短い言葉をもう少し詳しく敷衍し、解明したなら、現下における最も重要な文學的思想論が出て来るであらう。ひるがへつて思ふに、現在の作家達は、如何なる心構へをもつて創作に臨んでゐるのであらうか。一般的に言つて、現在くらゐ作家が樂天的な顔をしてゐる時代はないと思ふ。自分の思考や自分の苦悶など思つても見ず、易々と、苦勞

なしに、外的世界に身を任せ、安心してゐるやうに見えて仕方がない。ひとは、室生氏のやうな問題に突き當らないのであらうか。突き當つても、さういふ問題にこだはるだけの正直さを失つて、告白しないのであらうか。それとも、もはや、ひとびとは些の懷疑もなしに新しい文學的確信をつかんでゐて、懷疑する室生犀星氏が時代後れなのだらうか。恐らく、或る樂天的な人々は、室生氏の言葉を時代後れとするであらう。しかし、僕は、現在、作家の間からもう少し、「何を書くべきか、何を書いていいか」といふ苦悶の聲があがつてもいいと思ふし、さういふ苦悶に貫かれた作品が出るべきだと思ふ。さうでなかつたら、現在及びその直後の文學は、まことに空疎なものになり終るにちがひない。

支那や滿洲へ渡り、或は農村や工場地帯の生活狀態を觀察して、それを小説に、平面的に書いてさへ注目され、新しい文學として通るなら、現代くらゐ作家の黄金時代はないであらう。近代文學の多くの戰士たちが苦惱し、仆れたのは昔の夢となるであらう。或はまた、多くの作家が進言者として、工作者としての意見を述べる。現今の如く、衆智を聚め、一體となつて難問題を解決し、國家の新進展を期せねばならぬ時代に、作家の有用な意見が徴せられるのは當然であり、作家の新しい任務であるけれど、しかし誰も彼もがなにか一言、進言者として工作者としての意見を

述べてゐるのを見ると、誠に春風駘蕩たる感じがする。作家はなんの屈託もなささうなのである。僕はこのやうな風潮を一概に悪いとは思はない。それどころか、嘗てない生き方が、作家の道に開けたものとしてよろこぶものである。しかし、外的世界の影響力の強い時代の止むを得ない現象かも知れないが、作家の内的風景の見えないのが寂しいのである。従つて、作品の表情が浅く、乏しいのを嘆くのである。

湯浅克衛氏の「先驅移民」〔改造〕は、満洲に於ける集團移民の困難な開拓事業を描いた力作である。この事業をよく調べ、よく見て書いたといふ點には敬意を表するけれども、これを文學作品として見たとき、我々の受ける感じは、俗言すれば、ひとの禰で角力を取つてゐるといふ感じである。そこには作者の身についた自主的な思考もなければ、作者の内部から發した表情もない。作者はこの力作を調べて書くために、恐らく、多くの苦心を拂つたことであらう。しかし、自主的な思考を進める苦しみを放棄して、さういふ外面的な苦心を如何に積み重ねても、眞に人を動かすことはむづかしいであらう。そしてまた、作品の題材となつてゐるものは、苦闘に満ちた先驅移民の實狀であるけれど、作品の上にはあらはれた作者の精神は、至極呑氣に無表情に見える。

たとへば、文化的國策の線に沿ふといふことにしても、

今さら、我々の作家の道が、從來とさう變つた軌道を進むべきものとは思はれない。從來とても、鷗外や漱石や二葉亭や、或は武者小路氏や芥川氏などの先驅者は、日本人の民族性や人間性や生活感情などを深く探求し、高めるために闘つて來た日本の恩人である。僕たちの道も、それらの先驅者の進んだ道と變らうはずがない。ただ、我々次代者に課せられた任務は、それら先行者の示した日本人の民族性や人間性や生活感情などを、より深く探求し、より高く高めることにあるならば、我々の仕事は生易しいことではないのである。それは、我々に限らず、永遠にわたつて、あらゆる次代者の負ふべき宿命とも言へるのである。してみると、日本の文化國策に貢獻するためには、我々は血みどろの苦しみを必要とするのである。しかも現在、日本に於ける重大な革新期に遭遇してゐる。作家が、日本の文化に貢獻する道を見出すための苦難は、從來の比ではない。時代の波のために、今まで立つてゐた足場を浚はれて、それでもなほ作家は自分の生きる道を探求せねばならぬのだ。この困難なる時代を前にして、室生犀星氏のやうな眞面目な作家が、自分の立つてゐる足場の揺れるのに不安を感じながら、「我等何を爲すべきか」といふ最も素朴な、事古りた課題のために呆然とし、何をかいていいか、何をかくべきかと嘆ずるのは當然である。そのうへ、かういふ轉換期の特徴として、多くの文學上のオポチュニストを生む恐

れがあり、現に既に文學上のオポチュニストは現はれてゐるのであるが、それらの様を見て犀星氏が苦々しい思ひをしてゐるらしいことは、先日讀賣新聞に書いてゐた文藝時評の中の口吻にもうかがはれる。さういふオポチュニスト的な作品によつては、到底眞の文學を打ち樹てることが出来ないといつてゐるからこそ、犀星氏を初め、現代の良心ある作家の悩みがあるのである。

文學上のオポチュニストに對する警告としては、丁度、「新潮」十二月號、新潮評論の一つ、「戰時、戰後文學の課題」といふ文章がある。これはこの月における最もすぐれた評論であると思ふ。その一節を引用すれば、「現代は正にイズムの消滅時代である。文學は思想の重量によつてのみ計られ、従つて思想の動搖や轉換によつて、思ひがけぬ陥穽に苦悶し、乃至は時を得顔に花を咲かせてゐる。正に思想の暴威に近いまでの變動の渦中にあつて、今日眞の才能ある作家でありながら、しかも、明日の批評の前に立つて、自分は機會主義でなかつたと、強く自己を主張し得る者が幾人あり得るだらう。

イズムは一作者によつて容易に轉換し得られる時、單なる流行であるにすぎない。しかもイズムからイズムへの飛躍が、ある作家にとつては必然である場合、その各々のイズムは、その作家にとつては非常に重大な意義を持ち來す。その場合その作家を生かすのも、乃至はその作家を殺すの

もイズムに外ならぬからであり、かかる場合、イズムはその作家にとつては最早單なる流行ではあり得ないであらう。

ある作家が一つの思想から他の思想へ轉換する場合、作品に生ずる破綻や失敗の多くは、その作品の思想に原因するといふよりも、むしろ前者の思想に伴つた批評と後者の思想に伴ふべき批評の懸絶から生ずる場合が多い。單に思想から思想に轉換する者が、多くの場合イカルの失墜となつて失敗するのは、前者の思想に伴つた批評が充分把握されてゐなかつたことが、同時に後者の思想に適切な批評を把握する力を與へ得ないといふことを意味する。

従つて、思想から思想へ轉換し得る作家が、何故かくも簡単に思想から思想へと轉換し得るかは、一にかかつてその作家が自己の秩序を、本當に把握してゐないがためであるとも言ひ得られるのだ。云々」

この警告は、現代の作家が一應嚙みしめて味はふべき言葉だと思ふ。この變轉期に臨んで、僕達は時代の子となるために、焦慮したり、飛躍したり、心の秩序を失つたりしてはならない。もう少しじつくりと、内面的に、時間をかけて、成熟的な變化を遂げるべきである。

もうずつと前だが、戦争で隻手を失つた、バリトン歌手伊藤雄氏が、「タクトを左手に」といふ感想を東京朝日新聞に書いてゐたが、そのうち次ぎの一節が僕を感動させた。「……死線を越えると、人間が出來てくるといふことは、

よくいはれることであるが、自分の場合は果してさうであるか何うか、實は甚だ心細い。へんくつになること、みじめに見えること、さわがれていい氣になることを、私は極度に恐れて來た。努めて心を飾ることを心掛けた。その結果、ひどく皮肉な氣持になり、人の、自分に對する態度ばかりが氣になつた。私には世間の注目が重荷であつた。硬直した感情が、そこから出て來たのであつた。戦傷以來いろいろ強がりをいつて來たが、結局私は、泣くべき時に泣けなかつたために、いひかへれば、境遇の變化に早く順應しようとして、感情の自然な過程を経なかつたために、未だに割りきれないものが残つてゐるのであらうか。」

境遇の變化に性急に順應しようとして、感情の自然的過程を経なかつたために割りきれないものの残るのは、さういふ肉體的な病患者の場合に限らない。我々變轉期に處する作家の態度もそれと同じことで、感情や思考の自然な内面的過程を辿らなくては、ただ文學上のオポチュニストとして躍るだけのことであつて、眞に新しい文學を開き、日本文化に寄與することは覺束ないであらう。

高見順氏は、現在最も内的風景の豐饒な、むしろ過剰な作家であつて、氏の作品が成功するのも失敗するのもみなそのためである。氏の作品から道化た戯作者を感ずることがあるのも、内部に湧き出る情感を制御しきれなくて、持て餘した果ての泣き笑ひではないだらうか。「ある家の二

階と階下」(改造)は、性急な饒舌で、蜘蛛が或る家の二階と階下の生活を覗き見するといふ擬人的趣向も感心しないし、成功した作品とは思はないが、唯一點、即ち人間の感情の奔逸が、饒舌といふ形をとつて、ひたひたと讀者の皮膚にちかに打つて來るといふ點に忘れ難い印象をとどめるのである。或る家の二階と階下に住む憂鬱なニューモア作家や彼の小さな妻や、息子夫婦と折り合ひのつかぬ母親の姿などが、いつまでも僕の頭にこびりついて離れぬ。彼等の姿を思ひ浮べることは悲しいが、彼等はみな作者の旨を受けてゐるので、彼等の背後に悲しげな作者の顔の見えすぎるほどで、高見氏は現在最も複雑な、感じ易い精神生活を露出してゐる作家の一人であると思ふ。しかし、この作品なんか、作者がなんだか疎かにしてゐるやうな氣がしてならぬ。

これと一寸似た感情に誘はれた作品に、平川虎臣氏の「花」(新潮)があつた。作者の善良な人情や正義感には申し分がない。殊に、病篤い友人の細君が、再度の施療入院で冷遇をうけ、あられもない姿で灌腸させられる様を見て、主人公が怒りに顫へる場面は、情景感情ともに迫つて來て、思はず顔を反けたくなる。これはなかなか悲惨な物語ではあるが、作者の心の動きは、高見氏などにくらべてはるかに單調で、同じところを行き戻りするのみで、八方に流れて行かない。平川氏など恐らく色々な感情を心の中

に疊んでゐるに相違ないと思はれるが、その感情はルンペン的な、獨り合點に閉ち籠められ、萬人の心に通ふ精鍊を経てゐないやうに思はれる。だから悲慘な物語であるにも拘らず、その割合に訴へる力が生溫るものである。

山田清三郎氏の「嵐の蔭に」(文學界)は小説といふよりも、全篇叫びである。或は、表現派である。これは文學以前のものかも知れないが、僕はかなり興味をもつて讀了した。その興味といふのは、主として、木崎透といふほぼ察しのつく一人物に對するモデル的な好奇心であつたが、作者自身も、この作品が木崎透の眼に觸れることを願ふと書き、現實的な意義を持たせてゐるのだから、僕たちが現實的なモデルの興味を抱いて讀んだと言つても、決して失禮には當るまい。そして僕たちの好奇心は、木崎透といふ人物に對して、嘗て友人であり同志であつた作者が、その男の性格や思想や行動について如何なる解釋を下すか、さういふ方面に惹きつけられたのであつた。木崎透がそのやうな破目になつたのは、彼の以前の性格や行動から言つて、宿命的なものであると、一旦は木崎透に對して溫い氣持すら抱いた作者も、最後には、思ひ詰めて、木崎透が生を超えて生きることを望んでゐるのだ。自ら生を絶つよりほか生きる道はないと、嘗ての同志であつた友人に書き送る作者の一刻な、ひたむきな性格や人柄には、人を捉へる熱つばい力をもつてゐる。僕はモデルの興味をもつて讀了した

と言ひながら、半面では、その熱つばい力に引きずられて讀んでゐたことを、後になつて氣づいたのである。

その熱つばさや一刻さはどこから來るのであらうか。勿論持つて生れた性格から出るものには相違ないが、山田氏が背負ふ思想の業から生ずるものだと思ふ。

「この十數年の間、新しい時代への理想と希望を胸に描いて、互に困難し、苦闘して來た木崎よ、お互ひの青春から壯年期に近づいてゐるその十數年を、理想と現實と、運動と生活と、階級意識と人間感情との、さまざま矛盾の中で、あるひは幻滅し、失望し、また新しい勇氣を振ひ起しながら、互ひに身を以て闘つて來た木崎よ。僕はかくの如くして過去に別れを告げ、新たな信念更生に到達したのだ。いま私は、物の數ではない乍らもこの自分を、日本の新しい進路の中に、何ほどの力として結びゆかうと誓つてゐるのだ。」

この言葉の中には、作者の萬感が籠められてゐるにちがひないが、過去の思想の業を背負つて、新しい信念更生の道を進まうとする作者の姿が見られるのである。山田氏は恐らく終生、この思想の業を背負つて歩む人にちがひない。その十字架が、新しい信念を語る際、熱つばさとなりシンセリチイとなるのだと思ふ。

中本たか子氏も、過去の思想の業を背負つて進んでゐる人だと思ふ。いつか、中本氏と藤澤桓夫氏の日記が並んで